

第 8 章 教科学習における指導上の配慮

教科の授業では、教科書やプリントなど文字で書かれた資料が多く用いられ、児童生徒は、文字を読み書きして思考しながら学習を進めていく。このことは盲児童生徒においても同様であり、点字を「思考の道具」として活用しながら各教科の学習に取り組むこととなる。

第 6 章では、『日本点字表記法 2018 年版』を典拠として、点字表記の基本的な事項について解説した。しかし、教科の指導内容に関連したより詳細な点字表記の規則が存在するため、教師は、それらを十分に理解した上で当該教科の指導に当たる必要がある。

また、文部科学省著作の点字教科書は、点字の特性に配慮しつつ、盲児童生徒の円滑な学習活動に配慮した編集を経て発行されている。教師は、点字教科書編集の方針と具体的な編集内容を理解した上で、盲児童生徒の指導に当たらなければならない。

そこで本章では、各教科の指導内容に関連した点字表記の規則について解説するとともに、点字教科書編集の特徴や、当該教科を点字で学ぶ児童生徒に対する具体的な配慮事項について紹介する。

なお、教師にとって最も身近で分かりやすい点字表記の手本は、点字教科書である。原典教科書と点字教科書を丁寧に見比べながら点字表記の規則を理解し、指導してほしい。また、文部科学省著作の点字教科書については、「特別支援学校（視覚障害）点字教科書の編集資料」（以下、「点字教科書編集資料」という。）がウェブサイト上で公開されており、原典教科書からの変更・修正内容等を詳しく知ることができる。加えて、各節ではより詳しい情報が記された参考資料も紹介しているので、適宜参照されたい。

第1節 国語科における配慮事項

1 小学部低学年における配慮事項

文字言語は本来、音声言語の基礎の上に形成されるものであるから、その習得のためには、「聞く」「話す」という学習、特に聞き取る力を身に付けることが大切である。

点字で学習する児童は、授業場面において板書を確認することができないため、話の内容を聞き取ったうえで書き留めていくことになる。そこで、聞き取る力と、聞き取った内容を順序立てて組み立てる力は、点字で学習する児童にとってはより必要なものとなる。したがって、学習の初期の段階から短期記憶の活用を意識し、聞き取ったことをメモしたり記憶として整理したりすることを習慣化できるように指導することが重要である。

一方、点字の入門期の学習は単調な作業の繰り返しになりやすい。触読の練習や点字タイプライター、点字盤などによって点字を書く練習だけに終始することがないよう、児童の興味や学習意欲を喚起する指導を心掛けてほしい。また、小学部第1学年用の点字教科書の「点字導入教材」の取扱いにあたっては、児童の実態に合わせて練習用教材を補充したり、よりステップを細かくした教材を工夫したりといった支援を期待する。

点字の五十音の読み書きができるようになった児童に対しては、まず、言葉と文字との的確な対応ができているかどうかを把握することが重要である。児童によっては、「シクダイ（シュクダイ）」「タイクカン（タイイクカン）」のように発音の誤りをそのまま文字表記にしてしまう場合もあるからである。

点字の仮名遣いの指導では、助詞の「ワ」「エ」「ヲ」の表記の徹底を図るのがこの時期である。助詞の「は」「へ」については、墨字と点字との間に表記の違いがあるので、墨字使用児童と学習を共にするような場合には、墨字の表記についても併せて指導しておくことが望ましい。

長音を含む語の表記については、「オ」を添えて書くオ列長音の表記と、外来語や擬声語・擬音語の表記の指導に配慮を要する。「オ」を添えて書くオ列長音の表記については、「オオキイ」とか「トオイ」といった具体的な語例が出てきたところで、1語ずつ確実にその表記の仕方を身に付けるように支援する。外来語や擬声語・擬音語の表記については、片仮名で

書く言葉の学習と併せて指導するとよい。これも、具体的な語例をもとに丁寧に説明するようにしたい。

マスあけについてこの時期に十分指導しておく必要があるのは、分かち書きと切れ続きの基本である。点字の分かち書きの基本は文節分かち書きであるから、例えば、助詞の「ね」などを文中にはさんで「今日のね、給食のね、メニューはね、からあげとね、ほうれんそうのね、ごま和えです。」というように、「ね」をはさむことができる部分で一マスあけをすることを説明すると理解しやすい。複合語の切れ続きについては、友達や先生の名前、学校の名称など身近な固有名詞によって一マスあけをする部分について関心をもたせ、理解につなげるとよい。また、段落の最初と句点の後の二マスあけについても習慣づけておく。

句読点や表記符号の使い方については、句点、読点の使い方と第1カギの使い方を重点的に指導する。第1カギについては、会話を引用する場合に用いることを第一に指導し、その他の使い方は、教科書に出てきた時点でその働きについて指導する。教科書には、ふたえカギ、点線、矢印、つなぎ符などの符号類も用いられているので、矢印の形などは墨字の場合の基本的な知識とともに、理解できるようにするとよい。点字教科書編集資料の末尾には、「点字の初出一覧及び表記に関する学習事項」の表が掲載され、どのような点字がどの学年・巻のどの題材で出てくるかが一覧できるので、参考にされたい。

書き方の形式については、第6章を参照してほしいが、次のような書き方をこの時期に身に付けたい。

日記は、5マス目から日付と曜日、天気を書く。「ヨッカ」「ヨーカ」「トオカ」「24カ」など、和語読みの書き方に注意する。曜日は日付のあとに第1カッコで囲んで「☺ゲツ☺」としてもよいが、低学年では日付のあとに一マスあけて「ゲツヨービ」と書いてもよい。次の行の3マス目から本文を書く。

ノートは、ページ行に日付や教科名を書き、題材名は次の行の7マス目から書く。「第1段落」といった見出しなどは階層に応じて違ってくるが、低学年なら大体5マス目からでよい。黒板を利用できないので、ノートに書く内容をはっきりとした発音で分かち書きごとに区切りながら伝える。書き出し位置や第1カギ、棒線なども口頭で伝えながら、どのようなときにどのような符号類を使えばよいかを具体的な場面で理解できるように丁

寧に指導したい。書いた内容をあとで確認することも大切である。

基本的な作文の書き方についても、指導をしておく必要がある。特に題名と自分の氏名を書く位置については、この時期に確実に習慣化しておくことが大切である。一般に、題名は5マス目から書き出す。題名が1行に書ききれないときは、その2行目は題名の書き出しから二マス下げて7マス目から書く。氏名は、次の行の行末近くに書く。自分の氏名のマス数を覚えて、どのあたりから書き始めるとよいか、習慣づけるとよい。

手紙文は、実際に手紙を書く場面で指導するとよい。「誰かに気持ちを伝えたい」という動機づけを大切にしたいからである。点字では、触読の特性により、あて名や差し出し人の氏名を最初に書くことを説明する。また、この手紙文の学習の機会に、「さん」「君」「様」などの敬称、親称、愛称の切れ続きについて指導するのも効果的である。

書き誤りの修正の仕方の指導も、できればこの時期に行いたい。「⦿」の字を続けて書いて誤りの部分を消去する方法は、ノート、日記類、試験の解答などには用いてよいが、手紙文などには清書が必要であることを指導しておく。

教科の学習が進むと、単元テストなどを受ける機会もでてくる。点字の場合、解答用紙が前もってあるわけではなく自分で解答用紙を作成しなければならない。最初にテストの名称、氏名を記入し、全ての用紙にページ番号を記入して、指示されたとおりに答えを書く（原則は、問題文の番号や記号と同じものを書く）などの基本的な解答の仕方を身に付けられるようにする。

筆記用具として点字タイプライターを最初に指導するか、点字盤から指導するかについては、第5章でも述べているが、それぞれに一長一短がある。点字タイプライターを用いると一つの動作で1文字を書くことができるので効率がよく、読む方向と同じ凸面の形で書くことができ、書いた文字をすぐに指で確認することができる。しかし、入門期の児童には重くて持ち運びが不便である。点字盤は、携帯に便利である上にその操作によって指先の巧み性を高めることができる。しかし、筆記の速さの面では点字タイプライターに比べると十分とはいえない。入門期の児童には、読みと書きが逆にならない点字タイプライターで書きの指導を始めることが多い。

読みの指導にあたっては、両手で読んでいるか絶えず確認する必要がある。これは、今後の学習のために読みの速度を上げる点から大切なことで

ある。学習が進めば、行の左半分を左手読みで行い、中央付近で右手にバトンタッチして、右半分を右手で読み進める方法に移行する。そのうえで、特に左手で十分読めるように指導することが望ましい。左手で読みながら右手で書くという効率のよい学習活動を円滑にできるようにするためである。

【題材 8 - 1】

「聞いた話をまとめて、文章にしてみよう」

〈ねらい〉

聞いた話の内容を順序立てて文章にまとめ、伝えることができる。

〈内容〉

- (1) 「だれが」「どうした」を聞き取ることを意識して、話を聞く。
- (2) 「だれが、どうした。」の形の文を書く。「だれが」「どうした」の内容が複数ある場合は、それぞれの文をまとめて文章とする。
- (3) 書いた文章を確認する。

【留意事項】

- (1) 教師は、書いた文章を確認し、添削を行う。正しい表記で書くことも大切であるが、「だれが」と「どうした」を聞き取れているかをまず優先して指導する。
- (2) 児童の実態によって、聞き取る話の量や内容を調整する。

【題材 8 - 2】

「ニュースを聞き、要点をまとめてメモを作り、1週間の記録をとろう」

〈ねらい〉

話の要点をまとめ、メモのファイルを作ることができる。

〈内容〉

- (1) ニュースを聞き、5W1H（「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「なぜ」「どのように」）をメモにまとめる。
- (2) 日付、ページ番号を書き、ファイリングする。
- (3) 1週間の記録をまとめ、メモをもとに感想を発表し合う。

【留意事項】

- (1) ニュースは、テレビやインターネットのニュースだけに限らず、学校やクラスのニュースなどでもよい。

- (2) ファイルは、市販の紙ファイルを利用し、穴のあけ方、綴じ方、ページマスの利用の仕方などを指導する。
- (3) ページ行には、ページ数を書き入れることを習慣づけ、日付や内容の見出しを付けてもよい。
- (4) 利用しやすいように項目ごとに書き出し位置を変えたり、番号を付けたりするなど、様々な工夫の仕方を必要に応じて説明する。
- (5) ノート類のファイルについても、同じように指導する必要がある。各教科によって書き方やノートのとり方が異なるが、後で利用しやすいように様々な工夫ができることを、ページマスの利用やシールの貼り付けなどの具体例を示しながら伝える。各教科の担当者などと連携を図り、効果的な指導ができるよう配慮することが大切である。

2 小学部中学年における配慮事項

この時期に重点的に指導する点字表記の内容は、正しい分ち書きである。特に間違いやすいのは、本来分ち書きをするべき形式名詞や補助用言を、マスあけせずにつけて書いてしまうことである。形式名詞というのは、「ヨム□コト」「アソブ□トキ」「イマノ□トコロ」「オモッタ□トオリ」などの「コト」「トキ」「トコロ」「トオリ」などのことであり、補助用言というのは、「アソンデ□イル」「カッテ□モラウ」「ハナシテ□ヨイ」「サムク□ナイ」などの「イル」「モラウ」「ヨイ」「ナイ」などのことである。分ち書きをする判断の手掛かりとして前述したように「ね」をはさむと、形式名詞や補助用言の前には「ね」をはさみにくいために続けて書いてしまうものと思われる。そこで、この形式名詞や補助用言の語例が教科書に出てきた際には、別の語例も挙げながら、その都度指導してほしい。また、児童の書いた日記や作文などに続けて書いた箇所があった場合も、指摘して理解を促すようにする。

「メザマシドケイ」「ジカンワリドオリ」などの注意すべき複合語の切れ続き、「テヅクリ」「ハナヂ」等の連濁や、「ツヅキ」「チヂム」等の連呼の表記、「ティッシュ」「ファイル」等のよく使われる特殊音の書き表し方についても、その都度一つ一つ確実に習得できるようにしたい。

アルファベットを含む語の表記については、ローマ字の学習の時期に併せて集中的な指導を行うのが効果的である。大文字と小文字の使い分け、アルファベットの後に助詞などが続く場合は一マスあけ（PC□の□操作）

をし、仮名が続く場合はつなぎ符をはさんで表記（A 子ちゃん）することなどは、注意して指導したい事項である。（第6章参照）

表記符号の使い方については、中点の打ち方と読点の打ち方との基本的な違いを指導しておく必要がある。疑問符や感嘆符の使い方などとともに、作文などで適切に使用できるようにすることが望ましい。その他の表記符号については、教科書に出てきた時点で確実に身に付けられるように指導する。

特に、ノートは、復習する際に利用できるよう、児童自身が教科ごとにファイルに整理できるようにしておきたい。復習できるノート作成のためには、教師自身が囲み符号や矢印・棒線・小見出し符などの関係符号を使用したノート例を示すことが重要である。

書きの学習を点字タイプライターで始めた児童に対しては、この時期に点字盤も一通り使いこなせるように指導しておく必要がある。逆に、点字盤による指導を先に行った児童に対しては、同様に点字タイプライターの使い方の指導を行う。

さらにこの時期は、音声言語の基礎の上に文字言語の習得がなされることにより、書きの学習の到達目標である「自由に言語活動を行うことができる」ようにするための指導に取りかかる必要がある。児童は、文字そのものを使うことができるようになると、文字によって自己を表現したり、知識を得たりできるというような、文字言語の様々な有用性を実感する。しかし、点字の場合、日常的に文字が目に入ってくる墨字とは違い、触れなければ文字を読むことができないために、文字を読む機会が限られてしまう。児童の実態に応じた適切な題材を用意するとともに、教室環境においても創意工夫してほしい。

この時期は、児童の触読能力が大きく伸びるときでもあることから、児童一人一人の興味や関心に応じて、適切な読書情報を提供し、自発的な読書習慣の形成を図ることが大切である。学校図書館の利用も習慣にできるとよい。また、読みの速さを増すために、行の左半分を左手で読み、右半分を右手で読む両手読みに習熟させることが大切である。

【題材 8－3】

「物語の続きを書こう」

〈ねらい〉

物語を聞き、その続きを文章で表現する。

〈内容〉

- (1) 物語を聞く。
- (2) 内容を想像し、物語の続きを文章に表現する。そのとき、物語としてひとまとまりの内容であるように注意する。
- (3) 書いた文章を発表し合う。
- (4) 発表した際に指摘されたことを参考にして書き直す。

【留意事項】

- (1) 文集などにして自由に読み合うことができるようにするとよい。
- (2) 内容を重視するとともに、点字の読み書きの正確さ、速さなどの基本的な事柄についても、到達度を確認する。

3 小学部高学年における配慮事項

小学部高学年では、仮名遣いを含む語の書き表し方、分かち書きと切れ続き、表記符号の使い方、書き方の形式の四つの点字表記の領域について、それぞれ小学部段階でのまとめの指導をしておくことが大切である。小学部用点字国語教科書には、各教材末に新出の点字表記についての注意書きがあり、各教科書の巻末には、「点字ドリル」が掲載されているので活用してほしい。

仮名遣いと語の書き表し方については、「オ」を添えて書くオ列長音の表記のまとめが中心となる。該当する語の具体例を用いて指導を行うようにする。特に、「オオキイ」などと、その派生語（「オオシマ」「オオドオリ」など）については、その語の意味や漢字表記との関係を丁寧に指導しておく必要がある。そうしないと、長音符を用いる「オーサマ」や「オーエンダン」といった言葉まで「オ」を添えた表記になるおそれがある。

各学年で必要に応じて教科書に用いられていた特殊音の表記についても、この時期にまとめて指導しておくことが大切である。ただし、墨字との対応で整理しておく程度にとどめ、前置点の違いなどの解説は、この段階ではしなくてもよい。

古文の語の表記については、教科書の短歌や俳句に用いられている語に

ついて、ワ行の「ヲ」が助詞以外の言葉にも用いられるといった現代語の表記との違いについて指導すること、ワ行の「ヰ」「ヱ」の表記について指導することが大切である。特に、ワ行の「ヰ」は読点と読み誤りをしないように、また、「ヱ」は感嘆符と同形であることに留意する。

分ち書きと複合語の切れ続きについては、形式名詞や補助用言の前を区切る指導の徹底と、複合語の切れ続きについての関心を高め、表記の習熟を図る。特に複合語の切れ続きに関しては、複合語を構成している漢字・漢語などの意味や働きについての基本的な理解を深め、それらとの関連において切れ続きを考える態度、習慣を養うことが重要である。なお、点字の表記は、繰り返し指導することによって身に付いていくものであるから、点字表記についての関心をもたせる指導の場をできるだけ多く設けたい。

この時期には、指示符、小見出し符、段落挿入符、星印、詩行符などかなりの種類の表記符号が教科書に用いられるようになる。点字教科書編集資料の末尾には、前述したように、どの学年のどの教材でどのような符号が新出するかが掲載されている。それぞれの表記符号の機能とその使い方について理解するとともに、自分のノートや学級日誌、その他の表現活動などに積極的に活用できるように指導してほしい。

書き方の形式については、教科書に詩、短歌、俳句などが出てきたときに指導する。特に、読み取りに影響するような書き出し位置、詩の連と連との区切り、短歌の上の句と下の句のレイアウトなどへの注意を喚起する。

また、国語科の学習以外の表現活動において、文集などの目次や表紙、運動会や文化祭のプログラムの作成などで、レイアウトを工夫したり模様などを入れたりするという表現の楽しさが、書き方の形式にあることを体験できるとよい。

この時期になると、全国学力・学習状況調査などの大きなテストを受ける機会も出てくる。低学年の項でも述べたが、点字の場合、解答用紙が前もってあるわけではなく、自分で解答用紙を作成しなければならない。単元テストよりも階層の大きい学力調査の問題などでは、解答用紙の枚数も多くなる。全ての用紙にページ番号を記入すること、1行1解答を原則とすること、指示されたとおりに答えを書くこと、正しく訂正をすることなどの解答の仕方を、確実に身に付けるようにする。

読みの指導に関しては、読みの速度を上げるよう意図的に行う必要があ

る。速く読もうと努力をしない限り速く読めるようにはならない。点字1ページ分を読む時間を計測しておいて、その時間を短縮していく努力を児童一人一人の課題として主体的に取り組むのも一つの方法である。自分が好きなジャンルの作品を多読し、読書意欲を高めることも重要である。

4 中学部・高等部における配慮事項

中学部・高等部における点字の指導は、小学部で学習した内容を基礎として、点字表記の体系を総合的に理解し、正確で効果的な点字表記の習熟を図ることに重点を置くようにする。

仮名遣いについては、点字の仮名遣いと墨字の「現代仮名遣い」との相違を改めて確認しておく必要がある。古語や古文の仮名遣いは、和語は歴史的仮名遣い、漢語は現代語に準ずる表記になっていること、また、助詞の「は」「へ」も墨字と同じ表記になっていることについて、和語と漢語の見分け方とともに十分理解することが大切である。

仮名遣いのほかに、語の表記については、特殊音の表記のまとめの指導が必要である。既習の特殊音の表記の整理をしながら現在定められている43種の特殊音について、それを含む単語とともに読み方を含めて確認する。数字や数字を含む語の表記についても、この時期に丁寧に指導する必要がある。

数字は、点字表記の中で貴重な表意文字である。したがって、このことを踏まえて数字を含む語を仮名で書くか数字を用いて表記するかの判断が大切である。そのほか、1語中に数字やアルファベットを含む場合の表記について、数字と仮名、アルファベットと仮名、数字とアルファベットといった組合せのそれぞれの構成要素間の切れ続きの処理の仕方を身に付けることが重要である。

分かち書きや自立語内部の切れ続きの表記に関しては、現在の点字表記法が幅のある規定になっているため、それが点字表記の乱れにならないように留意する必要がある。そのためには、文法の学習との関連を重視し、点字表記の理論的な背景として文法の指導をすることが効果的である。例えば、形式名詞や補助用言の分かち書きは、これらが自立語であるという文法的な知識と関連させて再認識することができる。また、「そのうち」「このあいだ」などの語も「連体詞＋名詞」であれば間にマスあけを入れ、副詞や接続詞ならば一続きに表記するという判断を、文法的な知識を背景

に指導することができるのである。

国語の中学部用点字教科書では、分ち書きの基本を徹底させるために、第1カッコ以外の一続きに書くべき語が行末におさまらない場合はその語句をそのまま次の行に移している。また、助詞や助動詞は前の語に続けて一続きに書くものであることを重視した表記を採用している。しかし、実際には、助詞や助動詞だけを次の行に移す行末の処理の仕方もある。これは幅のある処理の仕方であって、誤りではない。そうした指導をするのも、この時期における大事な配慮事項の一つである。

句読点や表記符号の使い方については、個々の符号類についてその機能と用法とを理解し、これらを効果的に活用して豊かな表現ができるようにすることが大切である。特に、読点と中点の使い分け、読点の使用、外字符と外国語引用符との混同などに注意して指導する必要がある。

また、日本語の点字体系と外国語や数学記号、理科記号、あるいは点字楽譜などとの点字体系間の表記上の相違についても指導をしておく必要がある。例えば、日本語の点字と英語の点字の間では、疑問符、点線、ダッシュなどは異なる記号になっており、点字数学記号の中には、日本語の文章中には使用できないカッコ類もある。そうしたことについて相互に混同することがないように指導しておきたい。

書き方については、各種の形式を工夫し、必要に応じていろいろな形式を書き分けられる技能を養っておくことが大切である。特に、墨字による書き方の形式の多様さに関心をもたせ、理解につなげるとともに、見出しの大小を書き出しの位置や見出しに用いる記号・番号の書き方で区別すること、点字による表の書き方、略記の仕方、効果的なレイアウトができるように指導する必要がある。中学部用点字国語教科書には、資料編に「点字の書き方」「書き方の形式」が追加されているので、利用するとよい。

読みの指導については、この時期が特に触読能力の伸長が著しく、人生や社会についての関心が高いということを考慮して多読を勧め、少し長い読み物を最後まで読み通すように支援する。多読・速読のためには、前述したように、両手で読み、左手で行の左半分、行の中ほどでバトンタッチして右手で行の右半分を受け持つ読み方が最も効率がよい。

点字の書物は、墨字書物に比べると非常に限られる。墨字使用生徒ならば図書館や町の書店にあふれている本の中から読みたい本を自由に選べるが、点字使用生徒にとってはそのような経験は難しい。地域の点字図書館、

視覚障害者情報総合ネットワーク「サピエ」などを利用し、生徒自身が読みたい本を少しでも自由に選べるようにするなど、読書環境を整える配慮をしてほしい。

なお、漢文は、日本点字表記法に従い、点字では書き下し文で学習することになっている。漢文は表意文字である漢字だけで構成されており、基本的に点字による学習にはなじまないからである。訓点符号を用いた書き表し方も表記法には掲載されているが、国語科における学習では書き下し文で学習することを、墨字使用生徒とともに学ぶ場合は特に留意しておきたい。

また、高等部における点字指導においては、中学部での指導内容の理解を一層深めるとともに、その定着を図るようになる必要がある。

以上、国語科の教科学習における小学部から中学部・高等部の各段階の配慮事項を述べてきた。ここで、段階ごとに点字学習の内容と留意点を整理すると、表 8-1 のようになる。

表 8-1 点字学習の内容と留意点

学年	点字学習の内容	留意点
小学部 低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・五十音の読み書き ・仮名遣い（特に「オ」を添えて書くオ列長音の表記、外来語や擬声語・擬音語の表記） ・基本的なマスあけの仕方 ・句点、読点、第1カギの使い方 ・両手読みの習慣付け ・日記の書き方 ・ノートの作り方 ・基本的な作文の書き方 ・基本的な手紙文の書き方 ・テストの解答の仕方 ・書き誤りの修正の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉と文字との的確な対応ができているかどうかを把握する。 ・墨字の表記についても助詞の「は」「へ」などの基本的な内容を、併せて指導しておくことが望ましい。 ・点字タイプライターまたは点字盤の使い方に慣れる。

小学部 中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・分ち書き(形式名詞や補助用言、複合語の切れ続き) ・連濁や連呼の表記 ・特殊音の表記 ・アルファベットを含む語の表記 ・表記符号の使い方(読点・中点) ・ノート整理やファイリング ・両手読みによる触読能力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・点字タイプライターと点字盤の使い方について学ぶ。 ・適切な読書情報を提供し自発的な読書習慣の形成を図る。
小学部 高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・小学部段階でのまとめの学習 仮名遣いと語の書き表し方 分ち書きと切れ続き 表記符号の使い方 書き方の形式 本格的なテストの解答の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・多読のための読書環境を整え、読書意欲を高める。
中学部 高等部	<ul style="list-style-type: none"> ・点字表記体系の総合的な理解 ・点字の仮名遣いと墨字との相違の確認 ・古典と漢文の点字表記 ・特殊音の表記のまとめ ・各種符号類についての機能と用法の熟知と効果的な活用 ・各種の書き方の形式の工夫と、形式ごとに書き分ける技能の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・多読を勧める。 <p>学校図書館、地域の点字図書館、インターネット上の電子図書館の利用など、主体的な読書習慣を作ることができるように、支援する。</p>

5 準ずる教育課程での学習を行っていない児童生徒への配慮事項

準ずる教育課程での学習を行っていない児童生徒の障害の種類や程度は幅広い。最終的に、基本的な表記の仕方を理解して自分の意思を表現できる点字の読み書きを身に付けられる場合もあるし、自分の文字としての点字の読み書きの獲得には至らない場合もあろう。しかし、児童生徒の実態は変化するものであり、障害の種類や程度を把握するとともに、その折々の実態に応じて、点字という「自分の文字」の獲得に向けた支援は必要である。

点字の読み書きの習得については、基本的には、第4章・第5章で述べたとおり、準ずる教育課程での学習を行っている児童生徒のプログラムと同様である。小学部第1学年国語点字教科書に追加されている「点字導入編」の題材を参考に、より実態に合わせてスモールステップにするなど教

材を工夫してほしい。これも実態によるが、通常の大サイズの点字では触読が難しい場合は「大点丸」などのやや大きめの点字で提示したり、タックシールなどの刺激の強めの点字で提示したりすることが有効な場合がある。

点字導入の前にはそのレディネスが大切なことは言うまでもなく、第2章・第3章を参照してほしいが、レディネスがすべて整ってからでないと点字を学べないという固定的な考えではなく、点字を学ぶなかで、手指の感覚の発達や触察の力、両手の協応性が育ってくることもある。点字の導入をどうするか、どの時期に行うかは、児童生徒自身・保護者の願いをくみ取りつつ、担任を中心に担当者会をするなどして、専門的な見地、QOLの見通しなど多面的な検討を行い、柔軟な姿勢で臨んでほしい。

自立活動の時間の指導で点字の読み書きの学習をしている場合、それ以外の教科・領域を合わせた指導のなかで、実態に応じて点字に触れる経験を設定してほしい。墨字の場合は目につくところに文字があるが、点字の場合は設定しなければ触れることなく過ぎてしまうからである。給食の献立表や歌詞など、児童生徒の興味関心があるものを一緒に読んだり、児童生徒の気に入りのものの名前を書いたりするなどの活動もよい。

教科・領域を合わせた指導のなかで国語的な内容を取り上げて指導する場合は、先に述べた小学部低学年から中高等部までの配慮事項と同様の配慮で、よりスモールステップに分けた教材を工夫して実施すればよい。

また、障害の種類や程度によっては、最終的に点字の読み書きには至らない場合がある。それでも、学校生活のなかで触ったところに点字があるような環境があるとよい。例えば、自分の席であることを示す机の点字シールは、氏名を書いてもよいが、点の数が多くて触りづらい場合は、単純な⠆⠆⠆の線がわかりよい。朝の会などで、日課として点字カレンダーを触ったり、⠆⠆ ⠆⠆と書いたシールを貼ったりするなど、触ったところに点字があり、点字に触れて心地よいと思うような経験をもたせられるとよい。自分のマーク、文字の前段階の記号として触れる活動を大切にしたい。ただし、これも第2章・第3章で述べているとおり、実際の事物に触り、触ったものに対しての認識を深める経験がまず重要であることは言うまでもない。

点字の読み書きがやや進めば、自分の書いた文字を読んでもらったり、友達からの手紙を読んだりすることが喜びにつながる。「読めたね」「書けた！すごいね」などの言葉かけをし、自信につなげてほしい。ただし、言

葉として知っていることと実際の事物がつながっていることを絶えず確認することが大切で、点字の読み書きとともに言葉を育てる気持ちで支援することが大切である。

このように、自分のマークとして点字に触れて親しむ段階から、基本的な分かち書きや表記符号を理解して、点字盤で日記などを書いたり物語文などを読んだりできる段階まで、幅広い児童生徒の実態に応じて、各教科・領域を合わせた指導全般のなかでの支援を期待する。